

高岡の福祉を築いた先人達 (1)

Pioneers of Social Welfare in Takaoka (1)

宮田 伸朗

MIYATA Shinro

本研究は、富山県高岡における藩政期から戦後復興期までの福祉の先人たちの活動を辿り、社会福祉の今日的課題である行政と市民の協働による地域福祉推進のあり方についての示唆を得ることが目的である。研究方法は、史料・文献、周年記念史及び資料などにより、特徴的な活動と人物に焦点を当て、その歩みについて整理した。藩政期では、農民リーダーと町奉行による窮民救済、明治期には、医師・薬師による飢民救済、大正期～戦前では、宗教家による養老院と幼稚園開設、戦前～戦後復興期では、婦人会による託児所や養護施設の開設運営などがある。どの時代においても、困窮する民衆の救済と生活向上、子どもの健やかな成長への強い願いや意志と行動が注目される。行政と市民の協働という課題に取組み、答えを出してきたものは、まずは使命感を持った市民の主体的な取組みであり、これからのまちづくりや地域福祉の推進にとっての示唆を得ることができた。

キーワード： 社会福祉史、高岡の福祉、行政と市民の協働

1 はじめに

社会福祉の歴史に関する教育・研究は、1987（昭和 62）年に社会福祉士資格制度が創設された際、「社会福祉史」が国家試験科目に含まれず、その後も試験科目に組み入れられていないこともあって、福祉関係者の間でも関心を向けられることが少なくなってきた¹⁾。地方における社会福祉の歴史は、それぞれの地方において顧みられるのが通例であるが、富山における社会福祉史に関する史料・文献など先行研究は、川崎（1984）による富山県における戦後の社会状況の推移と社会福祉施設の消長に関する研究があるなど僅少である（宮田 2011）。近年では、梅本（2014）による富山県における保育所の変遷についての研究がある²⁾。

本研究の目的は、筆者の出身地、富山県高岡³⁾における藩政期から現代までの救済活動、社会事業、社会福祉事業とそれらの担い手となった先人たちの活動を辿りながら、社会福祉の今日的

課題である行政と市民の協働による地域福祉推進のあり方についての示唆を得ることである。なお、今回の第1報では、藩政期から戦前～戦後復興期までの期間とし、戦後から現代までの期間については、第2報で取り上げることとする。

研究の方法としては、富山県及び高岡に関する史料・文献、福祉施設・学校・団体等の周年記念史及び資料などを閲覧、収集、確認して、藩政期以降の高岡における福祉の歴史を辿りながら、特徴的な活動と人物に焦点を当てて、その歩みについて整理した。また、それらの活動や人物に関する史料・文献についても、今後の福祉史研究の参考に供する目的で、その項ごとに列挙した。

2 高岡の町立て～「行政と市民の協働」の原点

高岡では、1609（慶長14）年に加賀藩2代藩主前田利長による開町から400余年を経た2012（平成24）年、「高岡市総合計画（第2次基本計画）2012-2016」⁴⁾が策定された。計画では、行政と市民の協働による「共創のまちづくり」が提唱されている。「行政と市民の協働」の原点は、開祖前田利長による開町（町立て）にまで遡る。

加賀藩2代藩主前田利長（1526永禄5～1614慶長19）は、居城としていた富山城が大火により焼失したため、1609（慶長14）年、越中の西部に位置する関野台地に新しい城を築いた。利長は、中国の詩集『詩経』の一節「鳳凰鳴矣 于彼高岡」（鳳凰鳴けり、かの高き岡に）⁵⁾から、その地を「高岡」と名付け、家臣団が住む武家町、藩内外から呼び寄せた商人や職人が住む商家町、職人町、金屋町、寺町などを配置するとともに、米蔵、舟運、道路、用水などを整備した。

しかし、第3代藩主前田利常（1593文禄2～1658万治1）の治世となって、1615（元和元年）、幕府の「一国一城令」により高岡城は廃城となり、家臣団は金沢に移ることとなった。利常は「足止め令」を發布して商人、職人など「町衆」の転出を禁止する一方で、米、塩、魚、綿の取引や鋳物業の特権を与えて保護した。こうして2代利長が町立てした高岡の将来は、町衆の手に委ねられ、高岡は城下町から商工業の町へと向かうことになった。行政と市民協働のまちづくりは、まさに今日まで高岡市民に課せられた「歴史の宿題」であると言える。

なお、前田利長、前田利常に関する史料・文献には以下があり、本項でも参考にした。

- ・高岡商工会議所『高岡を愛した先人たち』H21,高岡商工会議所
- ・能坂利雄『富山県人』S52,新人物往来社
- ・神保成伍編著『高岡四百年のあゆみ』H21,文苑堂書店
- ・北日本新聞社『富山大百科事典』H6
- ・平凡社地方資料センター『富山県の地名』H6,平凡社

3 藩政期の先人たち

藩政期における窮民救済にかかわった人物として、義民・和田の佐助と奉行・長屋八内の2名を挙げることができる。佐助は民衆（農民）、長屋は役人（行政官）を象徴する人物と言える。

なお、和田の佐助、長屋八内に関する史料・文献には以下があり、本項でも参考にした。

- ・高岡商工会議所『高岡を愛した先人たち』H21,高岡商工会議所
- ・高岡市児童文化協会編著『高岡の伝承』S54,高岡市教育委員会
- ・高岡市広報統計課『たかおか散策』H8,桂書房

(1) 義民・和田の佐助による村民救済

旧市街地を抜けて金沢方面に向かう旧北陸道沿いに和田地区(旧利波郡佐野村和田野)がある。1649(慶安2)年、村民の嘆願により新田の開拓が許可されたのが、和田村の町立てとされる。しかし、重税による疲弊で逃散が相次ぎ、藩からは隠し田の疑いがかけられるようになった。1660(万治3)年、和田村の発展に尽力した肝煎・佐助は、隠開の罪により処刑された。その後の調べにより私利私欲ではなく、村民の窮状を救うためのものであったことが判明し、以後和田村は地租・地子米を免除され、佐助は義民と崇められるようになった⁶⁾。

義民・和田佐助の事例は、当時の農民の自助エネルギーと自己犠牲的リーダーの存在を示すものとして注目される。

(2) 民衆を救った町奉行・長屋八内

幕末の1858(安政5)年、北陸地方は大飢饉に陥り、高岡でも飢えた民衆たちによる商家42軒への襲撃・打ち毀しが起こった。『高岡を愛した先人たち』(高岡商工会議所2009)によれば、高岡の町奉行・長屋八内(1823文政6~1903明治36)は、暴動のさなか、自ら馬を駆り、「皆よく聞け!火事はもう消えた、家を壊さずともよいぞ」と町中を叫んで回ったという。打ち毀しはほどなく鎮静し、長屋八内は、米の配分、米価の安定、義捐金の募集などの救済策を実施するとともに、打ち毀しの首謀者を無罪放免したとされている。金沢の公事奉行所での取り調べで、「火事による破壊消防はあったが、打ち毀しはなかった」旨の長屋八内の証言により、死罪が免除されたという⁷⁾。

町奉行・長屋八内の事例は、役所(行政)による慈恵救済活動として、また町民の窮状に理解を示す役人(公務員)の行動を示すものとして注目される。

4. 明治期の先人たち

1871(明治4)年の廃藩置県により、現在の富山県の圏域(越中)は金沢県に含まれることになった。その後1871(明治4)年に七尾県、1877(明治9)年には石川県に編入されたが、1883(明治16)年に分県運動が結実して、現在の富山県が分離独立した。高岡に富山県庁設置の話もあったが、高岡は行政の中心拠点の県庁ではなく、経済の中心拠点の米穀取引所の設置を選んだ。1889(明治22)年には、小規模都市ながら他の30市と共にわが国初の市制が施行されて、高岡市が誕生した⁸⁾。こうして明治期の高岡は、商業、金融、銅器、漆器、電燈、紡績、捺染、肥料、海運、築港、鉄道、道路など民間の力によって、北陸一の商工経済都市へと発展を遂げていくことになった⁹⁾。

(1) 実業家・藤井能三の社会貢献

商工経済都市高岡の基盤を築いた経済人に、藤井能三(1846弘化3~1913大正2)がいる。藤井は、高岡市の北部伏木の教育・海運・築港など、人材育成と産業インフラの整備に取り組み、「伏木の近代化の父」とも呼ばれている。

人材育成の面では、学制発布の翌1873(明治6)年、藤井が持ち家を校舎に提供し、教員の給与・教材などの資金を全て立替えるなど、私費による県内初の公立伏木小学校を設立した。小学校では慶応義塾出身の校長を招聘し、地球儀の教材や英語教育など今日のグローバル人材育成の先駆けともいえる教育が展開されていた。また1876(明治9)年には、私邸内に「藤井女兒学校」

を設立したほか、県内各地の学校設立にも関与したとされている¹⁰⁾。

人材育成と経済基盤の構築に尽くした藤井の取組みは、ほぼ同時代を生きた渋沢栄一の『論語と算盤』¹¹⁾の精神にも通じるものがある。また、私利私欲のためではなく、実業家として社会貢献に寄与する姿勢は、今日の地域福祉のあり方にも貴重な示唆を与えるものとなっている。

(2) 医師・松田三知らによる飢民救済

1868(明治元)年の木町の火災と米価高騰、翌年の飢饉により多くの住民が飢餓状態に追い込まれた。新川郡では、農民による打ち毀し「ばんどり騒動」が勃発し、郡治局が金沢に鎮圧隊の出動を要請するに至った¹²⁾。高岡でも窮民の数は7,000人を超える多数に上ったが、郡宰と町役人の尽力で、一人の餓死者も出なかったとされている。天候不順と栄養出張による病人が続出したが、木舟町の医師・松田三知(1832 天保3~1914 大正3)は、窮民の住宅を巡回して、治療を施し米粥を与えた。また、小児科医・金子恕謙も治療を、薬屋・棚田屋喜兵衛は薬の提供を申し出ている。さらに松田は、「備荒儲蓄法」(1880 明治13)の趣旨に賛同して、1881(明治14)年、民間団体「拡充社」を設立し、貧民救済のための「慈恵金」を市役所に寄託している¹³⁾。

明治期は、「殖産興業、富国強兵」の時代であり、窮民救済は篤志家や宗教団体など民間の手に委ねられる時代であった。高岡でも、医師・薬師などの専門家による救済活動が注目される。今日の地域福祉推進の一つの方向性を示唆するものである。

なお本項では、藤井能三及び松田三知に関する史料・文献として以下を参考にした。

- ・高岡市『高岡市史(下巻)』S44,青林書院新社
- ・高岡商工会議所『高岡を愛した先人たち』H21,高岡商工会議所
- ・能坂利雄『富山県人』S52,新人物往来社
- ・神保成伍編著『高岡四百年のあゆみ』H21,文苑堂書店
- ・北日本新聞社『富山大百科事典(』)H6

5. 大正期～戦前の先人たち

大正～戦前期は、米騒動や関東大震災などを経て、方面委員制度、公設市場・食堂、市営住宅、職業紹介所、救護法などが国の社会事業体制が整えられていくものの、明治期に引き続き民間による施設・事業運営が行われる中で、次第に戦時体制に向かっていく時代である。

この時代、高岡では、宗教者・団体によって養老院と幼稚園が創設され、それぞれ激動の戦中・戦後をくぐり抜けて、1世紀を経た今日もなお、高齢者施設と保育施設としての役割を果たしている。

なお本項では、在田如山及び高岡幼稚園に関する史料・文献として、以下を参考にした。

- ・高岡市『高岡市史(下巻)』S44,青林書院新社
- ・川崎幸一「富山県における戦後の社会状況の推移と社会福祉施設の消長」『富山女子短期大学紀要第19輯』S59,富山女子短期大学
- ・パンフレット『高岡市長生寮』S46
- ・北日本新聞社『富山大百科事典(上巻)』H6
- ・佐々木敏雄編『高岡市史「現代編」編さん研究ノート』H18,高岡市史編さん室
- ・高岡保育園・高岡仏教協会『100年のあゆみ』H25

(1) 高岡養老院を創設した宗教者・在田如山

在田如山(1859 安政 5~1918 大正 7)は、1646(正保 3)年、加賀藩前田家の廟守供養の寺として建てられた、高岡市芳野の曹洞宗繁久寺の第 25 世である¹⁴⁾。在田は 1917(大正 6)年、庶民の浄財を集めて、老衰や病身でありながら扶養する者がいない者や自活できない者を収容・養育するために高岡養老院を開設し、女子 10 人を収容した小規模な施設をスタートさせた。その後 1931(昭和 6)年、高岡市社会事業協会に譲渡され、1932(昭和 7)年には救護法による救護施設・養老院として制度化され、1947(昭和 22)年には高岡市営となり生活保護法による保護施設として慈光園長生寮と改称された。また、1951(昭和 26)年までの間、終戦後の引揚者及び戦災者の母子住宅対策として、施設の一部が母子寮にも充てられていた¹⁵⁾。1963(昭和 38)年には、老人福祉法による養護老人ホームとなり、1973(昭和 48)年、富山県委託の特別養護老人ホームを併設したが、2007(平成 19)年に社会福祉法人高岡市身体障害者福祉会に移管され、特別養護老人ホーム・志貴野長生寮として運営されている。現在は、高岡市が運営する養護老人ホームと社会福祉法人が運営する特別養護老人ホームが、一体的な建物として運営されている。なお、繁久寺において養老院を開設した背景や経緯については、前掲の史料・文献では不明であるので、今後の調査研究を待たなければならない。

(2) 高岡市仏教各宗協会による高岡幼稚園(保育園)

高岡養老院を創設した在田は、幼稚園の創設にも関わっている。1913(大正 2)年、日本基督教会高岡伝道会が、高岡市坂下町に高岡最初の幼稚園・北陸女学校第三幼稚園(現坂ノ下保育園)を開園した。金沢から高岡に進出した基督教会に危機感を覚えた仏教界は、半年後に在田を会長に高岡市仏教各宗協会を設立し、梶原町称念寺を仮園舎にして高岡幼稚園を設立した¹⁶⁾。その後、二番町に独立園舎を設置移転した高岡幼稚園は、基督教会の幼稚園と並ぶ市内幼児教育の拠点として、園児数も次第に増加していった。第 2 次大戦中には、出征兵士の妻の就労増加に対応するため、1945(昭和 20)年に幼稚園から託児施設に転換、戦後児童福祉法の制定に伴って児童福祉施設の保育所として再出発し、2013(平成 25)年に 100 周年を迎えている。

6. 戦前～戦後復興期の先人たち

第 2 次大戦をはさんだ戦前～戦後復興期は、世界恐慌から戦時体制、戦中の窮乏生活へ、そして戦後「焼け跡」からの復興に向かう時期である。1918(大正 7)年の米騒動に象徴される富山の女性たちの力、生活のために働き、子どもを守り育てる熱い思いは、婦人会による託児所や施設づくりの運動にも発揮されていった。それらの施設は今日まで存続し、少子高齢化時代の今日、次代を担う地域の子どもの子育て支援や社会的養護のための重要な拠点となっている。

なお本項では、堀田くに、東外枝、婦人会活動に関する史料・文献として、以下を参考にした。

- ・北日本新聞社『富山大百科事典(下巻)』H6
- ・富山県婦人団体連合会『富山の女性史』H1,富山県
- ・高岡市連合婦人会『高岡市婦人会史-50年のあゆみ』S49
- ・(福)伏木保育園『年輪-目で見る70年の歩み』H7
- ・富山県民生児童委員協議会『富山県民生委員制度の80年』H10
- ・高岡愛育園編集委員会『三十年誌』S57

(1) 婦女会長・堀田くに、県内初の私設託児所

堀田くに（1890 明治 23～1985 昭和 60）は、伏木の廻船問屋に生まれ、進取や公益の精神に富む女性であった¹⁷⁾。鉄道や道路の発達に伴い、家業は傾いていったが、20代で伏木婦女会の会長に就任している。大正から昭和にかけては、疲弊した農村から働きに出た主婦たちが、港で女仲士として荷役作業に従事していた。雪の降る寒風の下で、子どもたちが港の倉庫の軒下に寝かせられている様子を見かねて、1926（大正 15）年、伏木町婦女会が県内初の私設託児所・伏木町託児所を、伏木一宮の念仏堂に開設した。婦女会では、開設運営資金を得るための内職、バザー、弁当販売、映画上映会などに取組み、託児料無料、間食費 1 日 3 銭で約 40 名の児童の託児から始めている¹⁸⁾。その後 1929（昭和 4）年には第二託児所を開設、戦後 1958（昭和 33）年には社会福祉法人伏木保育園と改称し、今日にまで至っている。この間堀田は、1981（昭和 56）年まで園長を務めたほか、地域児童の健全育成のための運動にも力を注ぎ、1968（昭和 43）年富山県内でも比較的早い時期に、市立伏木児童館が開設されている。なお伏木保育園は、1927（昭和 2）年に日米親善の印として、アメリカから送られた「青い目の人形」が保存されていることでも知られている。

(2) 婦人会長・東外枝と高岡愛育園、保育専門学院

東外枝（1889 明治 22～1976 昭和 51）は、看護婦となった後に外科医・東喜平と結婚、院長夫人として病院を支える一方、地域の婦人会活動に尽力した¹⁹⁾。戦後富山県内でも、海外からの引揚者、戦争未亡人や戦災孤児など、多くの保護を必要とする児童や家庭があったが、県内の児童養護施設は県東部に 2 施設定員 50 名があるのみで、定員もわずかであった。「呉西地区にも、そのような児童の養護施設を」との呼びかけ（東砺波郡出町婦人会長・森田華子）に、高岡市連合婦人会長の東が応えて 1951（昭和 26）年、高岡市、新湊市、射水郡、東砺波郡、西砺波郡、氷見郡の各郡市連合婦人会が呉西愛育園建設委員会を設置した²⁰⁾。県・市当局への陳情や土地探し、建設費用の募金活動などを経て、翌年には募金額 250 万円を富山県に寄付、地元佐加野地区婦人会有志等からの敷地提供もあり、1953（昭和 28）年には、定員 50 名の園舎が完成した。東は、地元高岡市の会長として理事長・園長に推され、以後 23 年間を園長として務めた。

(3) 婦人会と保育所、保育専門学院

昭和 20 年代は、乳幼児の水死や交通事故死など、不慮の事故による子どもの死亡が多発していた。農村部では、農繁期の母親が安心して働くことができるよう、季節保育所の開設が望まれるようになった。季節保育所は、地域のお寺や公民館などを利用して開設され、各地の婦人会員の労力奉仕によって運営されていた²¹⁾。昭和 20 年代から 30 年代にかけて、やがて季節保育所は、婦人会による常設保育所の開設運動に発展し、高岡市内各地区でも保育所が順次整備されていき、地元の婦人会長が園長・副園長を務めることもあった²²⁾。

各地に保育所が開設されるに伴って、保育に当たる保母（保育士）の必要性が高まり、保母養成施設の設置が必要となってきた。1953（昭和 28）年、当初は保母（保育士）養成施設と婦人会館の併設を見込んでいた県の構想が変更を余儀なくされ、国庫補助など建設財源の見通しが危うくなった。高岡市連合婦人会（東外枝会長）が高岡市での設置に乗り出して、総額 1050 万円のうち 200 万円を寄付、定塚校下から敷地の寄付もあって、1955（昭和 30）年、高岡市中川上町に県立保育専門学院が開設され²³⁾、今日まで 60 年間に約 3,000 名の保育人材を輩出してきて

いる。なお、学院は2016（平成28）年3月に廃止されることになっている。

戦後の婦人解放の熱い時代とはいえ、地域婦人会の強烈な思いと一致協力した行動力が、今日の保育・児童福祉事業の基盤を築いてきた歩みは、地域福祉の原点とも言うべき「住民主体の原則」そのものであり、地域福祉推進が唱えられている今日、関係者が大いに学ぶべき歴史である。

8. 先人に学ぶ～市民協働によるまちづくり

高岡の福祉を築いた先人たちの足跡を辿ることで、今後の市民協働による地域福祉推進についての示唆を得ることが期待できる。

藩政期では、農民リーダー・和田の佐助の自己犠牲的献身、町奉行・長屋八内の役人らしい機転の利いた行動による窮民救済が印象的である。役人の使命のためには役所や職責の枠にも囚われない姿勢は、今日の行政において忘れられがちなことである。

明治期には、医師・薬師としての通常の職務範囲を超え、専門性を生かした飢民救済への取り組みが注目される。まさに「医は仁術」であり、高岡にも仁術を実践する医者が存在した事実は、注目されてよい。大正期～戦前では、仏教協会（宗教家）による養老院と幼稚園（後に保育所に転換）が開設されている。今日の宗教界のあり方にも、一石を投じる史実である。

戦前～戦後復興期では、婦人会による託児所や養護施設の開設運営がある。女性らしく愛情あふれ、大胆かつ粘り強い活動は、今日の婦人会活動の低迷状況からは、想像もできないレベルのものである。

こうして見てくると、どの時代においても、困窮する民衆の救済と生活向上、子どもの健やかな成長への強い願いや意志を持って行動した先人たちの姿が、輝かしく注目される。歴史の宿題に取り組み、答えを出してきたものは、行政への依存ではなく、まずは使命感を持った市民の主体的な取り組みであり、これからの市民協働のまちづくりや地域福祉の推進にとって、大いなる示唆に富むものである。「当事者」、「専門家」、「宗教家」、「地域女性」、「実業家」、そして市民に共感しながら市民を支え、リードしていく「行政」がお互いの特色を發揮しながら協働していくことが、これからの地域福祉の推進やまちづくりに必要不可欠な要素である。

9. おわりに

行政と市民の協働による地域福祉の推進は、社会福祉の今日的課題である。高岡においては、2代藩主前田利長による町立て以来400年に渡る「歴史の宿題」でもある。高岡の福祉を築いた先人たちの足跡を辿ることで、今後の市民協働による地域福祉推進についての示唆を得ることができた。戦後以降から現代までの先人たちの歩みについては、次回の研究・第2報で明らかにしていきたい。また、同一事象をめぐって、複数の資料間で一部記述が異なるケースがあったので、今後精査・確認していきたい。

なお、本稿は、2014（平成26）年8月に高岡市で開催された「第20回地域福祉実践権研究セミナーinとやま」（主催・特定非営利活動法人 日本地域福祉研究所）のシンポジウムでの発表データ（パワーポイント画像）の一部を参考にして、加筆修正と再構成を施したものである。

<引用・参考文献>

- 1) 「社会事業史学会ニュースレターNo.18 (2009)」によれば、2009年5月現在、社会事業史学会の会員数は270名となっている。
- 2) 川崎幸一「富山県における戦後の社会状況の推移と社会福祉施設の消長」『富山女子短期大学紀要第19輯』1984
宮田伸朗「富山の社会福祉史関係資料」『富山国際大学子ども育成学部紀要第2巻』2011
梅本恵「富山県における保育所の変遷(1)」『富山短期大学紀要第49輯』2014
- 3) 高岡市は、明治の廃藩置県から2006(平成18)年の「平成の大合併」までに、周辺市町村との合併が繰り返されて現在の市域が形成されている。本稿では、歴史的に高岡市周辺の市町村であっても、現在の高岡市に含まれる地域の全てを対象として、「高岡」と表記する。
- 4) 高岡市『高岡市総合計画(第2次基本計画)2012—2016』2012
- 5) 「鳳凰鳴矣 于彼高岡」(鳳凰鳴けり、かの高き岡に) 中国の伝説上の鳥^{ほうおう}鳳凰の鳴き声は、名君の登場を告げるものとされている。
- 6) 和田神明社(高岡市和田)、和田の佐助顕彰碑
- 7) 高岡商工会議所『高岡を愛した先人たち』H21 高岡商工会議所 p.14
- 8) 富山県『置県百年』S58
- 9) 神保成伍編著『高岡四百年のあゆみ』H21 文苑堂書店 pp.31-45
- 10) 前掲書7) p.18
藤井能三顕彰会『藤井能三伝』S40、伏木小学校『伏木小学校史』S48によれば、1874(明治7)年に新校舎(洋風)を建て、名称を「大成小学校」としたとされている。
- 11) 渋沢栄一『論語と算盤』2008 角川学芸出版
- 12) 北日本新聞社『富山大百科事典・下巻』H6 pp.700-701
- 13) 高岡市『高岡市史(下巻)』S44 青林書院新社 pp.1095-1102
- 14) 北日本新聞社『富山大百科事典・上巻』H6 pp.53-54
- 15) 「高岡市長生寮パンフレット」1971
- 16) 高岡保育園、高岡仏教協会『100年の歩み』2013
- 17) 前掲書7) p.37
- 18) (福)伏木保育園『年輪—目で見る70年の歩み』H7 p.6
- 19) 前掲書7) p.35
- 20) 高岡愛育園編集委員会『三十年誌』S57 pp.27-28
- 21) 富山県婦人団体連合会『富山の女性史』富山県 H1 p.176
- 22) 高岡市連合婦人会『高岡市婦人会史—50年のあゆみ』S49
成美、川原、佐野、立野、能町、古府、太田、牧野、戸出などの各校下婦人会で季節保育所・常設保育所が開設されている。成美では留守家庭児童の「鍵っ子教室・ひばり学級」が児童文化センターの建設にまで発展した。
- 23) 前掲書21) pp.178-179